

氏 名	かわ さき やすし 河 崎 靖
学 位 の 種 類	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	論 人 博 第 14 号
学位授与の日付	平 成 16 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Graphematische Untersuchungen zu den Heliand-Handschriften —— am Beispiel des dentalen Konsonantensystems —— (古ザクセン語叙事詩『ヘーリアント』の書記法的研究)

論文調査委員 (主 査) 教授 西 本 美 彦 教授 石 川 光 庸 教授 尾 野 照 治
助教授 ヨリッセン・エンゲルベルト

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、古ザクセン語の書記法の発展傾向を基盤にして、ゲルマン語全体の音変化に関する体系を実証的に解明することを試みた研究である。

本論文は、個々の写本一つ一つの異書記体を書記素に抽象化し体系づける書記素論の観点から、書記上の揺れを客観的に体系化しうる方法論の確立と、その揺れに関連して従来から存在している諸問題の解決を試みている。申請者はまず、従来の書記素の概念の不備を指摘し、全く新しい書記素の定義に基づいた論述を行っている。

本論文で提唱されている書記素と書記法に関する方法論は、書記に由来する文献学上の、そして言語学上のさまざまな問題を解決するに当たって、科学的で応用性の高いアプローチを試みたものである。

またこの新しい方法論の枠組みを用いることで、書記の揺れを緻密な統計調査に基づく客観的な数値によって分析し、個々の写本の持つ特性を顕然化することができるのみならず、またある一写本を書いた人物を特定化することも可能であり、またいつの時代のいかなる写本であっても、書記上のさまざまな諸問題を解決することができると論じている。

本論文は全7章から成り立ち、まず、第1章では、書記変異へのアプローチのあり方の根本的な前提について論じ、言語事実に即した理論的枠組みを検討している。このために、あらゆる先行研究を踏まえて最も有効であると見なしうる普遍的な方法論、いわばどのような書記体系にも適応可能なモデルを提示している。そのモデルで申請者は、各音が来源する語史的情報(=語源)と、その音がおかれた音環境との組み合わせからなる位置価(Lautposition)と、実際のテキストに書かれた文字表記(Graphie)とが一体となって1つのユニットを形成しているとし、その複合体を書記素(Graphem)と定義している。

第2章から第4章にかけては、第1章で提唱した理論モデルのケーススタディとして、古ザクセン語叙事詩『ヘーリアント』の主要写本であるM写本(第2章)・C写本(第3章)および写本断片P,V,S(第4章)の詳細かつ厳密な統計調査を行っている。これらの章では歯茎音系列の子音体系(Konsonantismus)に属する音すべてを、個々に西ゲルマン語の語源に遡って検証し、それをもとに、位置価(Lautposition)という概念を用いることによって、書記素を決定する根拠をより厳密化しうることを論じている。ここでの作業を踏まえて得られた数値の分析結果に基づき、『ヘーリアント』の諸写本に見られる書記法上の揺れに対して、書記素全体の体系を打ちたてるのではなく、パラメータという発想のもとに、書記変異という現象の実質的な位置づけについて論述している。

第5章と第6章では、書記の揺れを、古ザクセン語の音変化のプロセスと関連づけることで、この書記法の現象を広くゲルマン語の歴史の中で、改めて捉え直すことを試みている。言語事実レベルでの書記変異に見られるデータを通して、ドイツ語史上極めて重要であり、またその評価に異論が多い西ゲルマン語の語中音軟音化(Lenisierung)および語末音硬音化(Fortisierung)という二つの音現象が継起的な現象ではなく、同時に機能していると結論づけている。

終章においては、地理的に広い大陸ゲルマン語全体の視野から、ゲルマン語全般の音的・書記法的発展傾向について包括的な見解を論述している。これまで明確な形で捉えられていなかった音・書記の相互的な影響関係およびその傾向性を、ゲルマン語の視座で説明することを試みている。

以上のように、本論文は、位置価（Lautposition）という新しい概念を導入することによって、書記素（Graphem）の定義を従来とは全く異なる視点から捉えることから始め、古ザクセン語のさまざまな写本の書記変異を分析している。本論文は書記素を包括的な視点から定義したことによって、異書記体を客観的に数値化し、その分析結果として、語末音硬化の定着に関する従来の諸説に疑義を唱え、根本的に再考する必要があると論じている。

また新しいアプローチの枠で、あくまで言語事実在即して、語中音の軟音化という本来は別の音現象からの影響関係をも考慮に入れながら、語末音硬化の問題の捉え直しを試みている。併せて、音・書記レベルでの揺れという今回採り入れたパラメータの考え方が、書記レベルを超えて、例えば動詞活用 of the 平準化などといった形態論や、さらには統語論等の他の言語レベルにも応用する可能性について論じている。特に語末音硬化という現象の考察を通して提唱された、異種形（Varianten）を体系化しようという方法論は、他の言語研究諸分野にも、ひいては言語現象一般にも広く適応できると論及している。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、主としてドイツ初期中世の写本に見られる書記変異による問題点に的確にアプローチするための新しい方法論を確立したものであり、書記論研究に新しい科学的視点を提示した画期的な労作である。

周知のように、ドイツ初期中世の個々の写本には書記上の多くの揺れがある。申請者は、異書記体を書記素に抽象化し体系付けようとする書記素論の観点を採用する。そして、その揺れを客観的に体系化しうる方法論を確立し、それによって異書記体に由来する写本に関する諸問題を解決することに成功している。

書記論の分野に関しては、そもそもこの領域自体が学問として自律的に成り立ちうるかという根本的な問題もあり、異書記体の揺れに関しては、これまでは研究者の主観的な解釈に任されてきた。そのため従来の書記素の定義づけも、曖昧さを免れることはできなかったし、きわめて一面的な取り扱いを受けてきた。特にドイツ初期中世の文献を扱う場合、従来の書記素論は、えてして現代語の考察と同様に、言語研究のあらゆるレベル（形態論・統語論等）を自律的な体系として想定しがちであった。これに対し本論文は、言語の仕組みの背景を問い直そうとする一貫した姿勢で貫かれている。

そこで申請者は従来の書記素の概念の不備を指摘し、全く新しい書記素の定義に基づき論考を進めている。本論文が提案している書記素と書記法に関する方法論は、文献学上の、そして言語学上のさまざまな書記に由来する問題を解決するための、応用性の高いアプローチとなっている。

申請者はまず、個別言語レベルにおける書記素研究の方法論に関する枠組みを示し、さらに史的言語学・言語地理学といったマクロな視点に立って、この学問領域における従来のアプローチの不徹底性を究明し、それによってゲルマン語の音変化の発達傾向に関する新しい解釈を提言している。

申請者は、言語事実レベルの書記変異の現象を、書き手の書き間違いや、外国語の影響といった個別的現象として、その都度いわば恣意的に処理してきた従来の方法を批判し、それ自体を、できるかぎり根拠づけられるべき言語使用の表れとして捉え、統計調査から導き出される客観的な数値をもとに実証的な分析を行っている。

特に注目し値するのは、書記素（Graphem）の定義に位置価（Lautposition）という新しい概念を導入し、それによって古ザクセン語の叙事詩『ヘーリアント』（Heliand）の諸写本に見られる書記法上の揺れの現象を説明している点である。申請者は、写本の書記変異を観察するためにtype（関与する度合い）、token（絶対頻度）の枠組みを用いて解析し、写本すべてに現れる書記体（Graphie）を網羅的に調査している。この作業から得られた言語事実データのみを手がかりとし、『ヘーリアント』全5写本（M, C, P, V, S）の書記変異の現象を分析している。その結果、一見、無際限に見える変異は、時代差（diachronisch）、写本間（diatopisch）という要因のみならず、音環境あるいは音変化の観点から一定の説明ができることを実証している。この成果により、変異の現象は個々ばらばらに起こっているわけではなく、それが置かれている音的な環境（例：語中音と語末音の間の差異）に応じて規則性があるということ、また、その背後にある史的な音変化の

プロセス（例：語末音硬化）による解釈が可能であることを解明している。

本論文の採るアプローチは客観的な数値を根拠としており、この方法論を応用することによって、いわゆる語末音硬化の進行・定着の問題に関し、たとえば古ザクセン語では紀元後800年頃、または古高ドイツ語から中高ドイツ語への移行期に起こったと設定されていた従来の諸説に大きな疑義を唱えている。

さらに本論文は、語末音硬化の現象を根本的に再考することにより、本来別々の現象とみなされがちであった語中音の軟音化および語末音の硬音化が、一方の進行が他方の定着を促す、相補的で併行する音現象であることを明確に証明している。

これら二現象が広く大陸ゲルマン語全体に起こっていることを考え併せると、音・書記の相互的な影響関係は今回の方法論の適用により的確に捉えられることが裏付けられたと言い得る。

また本論文は、今回採り入れたパラメータの考え方を、語末音硬化に限らず、音・書記レベルでの揺れという書記レベルを超えて、形態論・統語論（例：動詞活用に見られる平準化の現象）など他の言語レベルにも適用しうることを例証している。

このように書記変異の現象について、通時的にも方言学的にも説得性の高い解明を行うことによって、写本異同の問題点の所在を明らかにした本論文は、社会言語学・言語地理学に関する諸問題を包括的な観点から分析することのできる新しい学術的手法を提唱し、かつその有効性を見事に実証している。

このように書記論における一現象を解明するために考案された本論文の言語学的手法はきわめて創造的である。実際、語末音硬化という一音韻変化の考察で新事実を発見したように、本論文で提唱された異種形（Varianten）に関する方法論を用いたアプローチが、他の言語分野での現象一般に応用できるという主張には大きな説得力があり、申請者の所属する講座の目的に沿った基礎的研究として高く評価できるとともに、今後、言語学一般・比較言語学・中世文学等の関連分野での高度な貢献が期待される。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年10月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。